

1. ケベックと日本の交流発展のための私のささやかな貢献

リシャール・ルクレーール
Richard Leclerc

一九九〇年夏に初めて日本に滞在して以来、日本社会の動きには格別の関心を寄せてきた。一九九〇年の旅行では、一〇日間東京と大阪に滞在し、日本留学のための研究テーマを探した。一九九〇年十月に日本政府（文部省）奨学金留学生（研究留学生）を獲得し、一九九一年から一九九三年まで筑波大学で地理学のポストドクター研究を行った。当時日仏地理学会会長であったフィリップ・パンシユメル Philippe Pinchemel 先生（一九三二—二〇〇八）へご連絡したところ、高橋伸夫先生を紹介いただいた。高橋先生はフランスで博士号を取得し、フランス通かつフランス語堪能な教授であった。私の研究指導を引き受けてくださり、文部省奨学金を獲得するための推薦書をくださった。高橋先生には常に感謝している。留学に先立ち、二年間にわたりラヴァール大学で日本語と日本の歴史を学ぶこととなった。

一九九一年十月に筑波大学に到着し、半年間は留学生センターで日本語の集中コースを受講した。このコースは大変厳格な内容だったが、日本語の基礎を習得し、また日本社会の仕組みをよりよく理解することに役立った。一九九二年三月に三本コースを無事修了し、いよいよ研究生生活がスタートした。研究テーマは新幹線が日本の国土と地域開発に与える影響についてであった。当時、ケベック政府はケベック市とモンレアル市を結ぶ高速鉄道の敷設を検討中であったため、適切な時宜を得たテーマだった。一九九三年に分析結果をもとにした研究報告書「新幹線ネットワーク…国家の挑戦、近代日本の反映」を提出することができた。

日本へ出発する前から、一九世紀末以降の日本におけるケベック人たちの活躍を扱った本を執筆したいと計画していた。日本での彼らの貢献についてはそれまでほとんど語られていなかった。日本とカナダの交流を扱った文献中でも、ケベック人の貢献については簡単に触れられるにとどまっていた。一九九〇年代初めに、ケベック外国宣教会のシャルル・エメ・ポルデュック Charles-Aimé Bolduc 宣教師が、日本での各修道会活動についてのデータを収集するため、ケベックの宗教界へ向けて質問状を作成、発送した。この膨大な調査結果が、私が研究を開始するにあたっての基礎データとなった。

ケベック帰郷後、モンレアルのソシエテ・サンジャン・バティスト（サンジャン・バティスト協会）の奨学金基金を得て、*Des Lys à l'ombre du mont-Fuji : Histoire de la présence de l'Amérique française au Japon* と題する書籍を出版することができた。ちなみに同協会は当時ジャン・ドリオン Jean Dorion 氏（一九九四—二〇〇〇年ケベック政府在日事務所代表）が会長を務めていた。

この本の目的は、日本社会におけるケベック人の貢献、とりわけケベック出身の約千人に上るケベック宣教師たちの活躍と、彼らの活動を支えた修道会の支援を描くことにあった。またこの本はケベックの人々に数世紀にわたる国際社会での彼らの役割を意識させ、一部に言われるようにケベック人が北米に孤立状態で生きてきたのではないことを知らせることを目的としていた。テーマの重要性にかんがみ、この出版は一九九六年六月二十九日（土）付のケベック日刊紙ル・ドゥヴォワール紙の一面で「着物を着たケベコワたち *Des Québécois en kimono*」として紹介されることとなった。一九九九年同書はカナダ首相出版賞を受賞し、大島俊之教授の翻訳により日本語訳『日本で活躍したケベック人の歴史』が出版された。

この計画が実現した後、私は以下のようなテーマに関心を持った。1. ケベックの地名への日本の影響に関する研究、2. ケベックのいくつかの地名のカタカナ表記をフランス語化するための提案、3. 日本語でのケベック関連文献のリスト化、4. *Bulletin de l'Union missionnaire du Clergé* における日本の表象についてである。二〇〇九年、私は国立行政大学院（ケ

ベック)へ公共行政学の修士論文を提出した。ISO9001タイプの品質管理システムの実施について、ケベック、サントーギュスタン・ドゥ・モレーと千葉県九十九里町のそれぞれの自治体における例を比較分析した。

一九九四年から一九九七年にはラヴァル大学で日本社会に関する講義を担当した。また一九九二年以降、ケベック、カナダ、日本で開かれた各種シンポジウム・講演会の席で、ケベックと日本の関係に関する講演を行った。さらに一九九三年から一九九四年にはケベック・日本文化交流友好協会の会長を務めた。

個人的な研究活動と並行して、一九九八年からは国際関係省へ顧問として入省し、七年間にわたり日ケ関係の発展に貢献することができた。具体的には、例えば一九九八年には日本に初めて定住し布教活動を行ったエレヌ・バラディ(Hélène Paradis, 修道女(一八七四—一九六〇)の熊本到着百周年を記念する行事の組織運営を担当した。この記念事業の一環として、ケベックのいくつかの地名の命名を行った。こうして、今日ケベック市のある通りにはエレヌ・バラディの名が冠されている。またコート・ノール地方には、一九一七年に日本で初めて活動を行った芸術家の名前をとってポール・デュフォー(Paul-Dufaut)の名を冠する湖が、また一八八七年五月に初めて日本を訪れたグザヴィエ・ジャンドロ(Kavier Gendreau)宣教師が神戸を訪れ、この地で亡くなったことを記念して神戸湖が存在する。

これらの地名の公式命名を記念して、ケベック地名委員会ニコール・ルネ(Nicolas René)女史は、一九九八年六月八日に、モンレアル・ジャパン・ウィーク開会式の席で、地名命名の証明書を猪又忠徳・モンレアル日本国総領事へ手渡した。このモンレアル・ジャパン・ウィークの提唱者でもあった猪又氏はケベック州との関係が深く、日ケ関係へ多大の貢献を行った人物である。

翌年、私の提案により、コート・ノール地方の別の湖が大阪湖と命名された。これは一九七〇年の大阪万博へのケベック州の参加を記念したものである。同じ年、私はケベック首相の大阪、東京公式訪問の準備を行い、首相に同行した。

二〇〇三年夏、ケベック政府在日事務所の三十周年記念の折には、モンレアルでケベック国立図書館文書館の展覧会

「Québec-Japon : Une relation plus que centenaire (ケベック・日本：百年を超える関係)」を企画運営した。同館所蔵の資料をもとに、日ケ間の交流の豊かさを示すことを目的とした展覧会であったが、同時にケベック市のガブリエル・ロワ図書館を紹介する機会ともなった。

二〇〇〇年初頭からは、アジア太平洋地域のフランス語教員を対象とした「ケベックの言語・文化・社会」に関する研修プログラムを企画した。一九七八年からケベック国際関係省は、ラテンアメリカ地域を対象に同様のフランス語教員向けの研修を開催していた。一九九九年七月に初めて、同省アジア太平洋局は、ラテンアメリカ・アンティル局が主催したフランス教員研修へ、アジア太平洋地区から六名の研修生を受け入れ、うち二名が日本人であった。この経験は彼らにとってケベック社会の現実を発見する機会となった。

この研修は影響力のある人々にケベックについて知ってもらうための優れた取組みであり、アジア太平洋局は、二〇〇〇年に同地域のフランス語教員向けの独自の研修プログラムを開始することを決定した。ケベックへ関心を示すにけるための具体的な活動が企画された。日本との間によりよい直接のコミュニケーションを持つことによつて、コミュニケーション教育・文化・制度的関係が促進されることが期待されたのである。「ケベックの言語・文化・社会」研修奨学金プログラムは戦略的な意味を持ち、このような意思の実現のために役立つている。その目標は、フランス語教員のケベックへの興味を目覚めさせ、ケベック研究への関心を促進することにある。さらに、彼らがケベックを知ることにより、日本で他の教員や学生へ、その関心を伝えることも期待される。フランス語圏の中でケベックを新たな留学先へと選択させることにもつながるのである。

一九九九年以降、研修参加者たちは教育・研究の分野において日本でケベックを紹介することに貢献している。私は二〇〇六年に国際関係省から現職へ転じたが、同プログラムが現在も継続していることを嬉しく思っている。今日この研修プログラムは「フランス語教授法、ケベックの文化と社会に関する研修」と名を変えている。